

「朽ちない冠」

2023年1月1日

コリントの信徒への手紙一 9：19～27

佐々木 佐余子

今年初めての説教です。気が引き締まる思いがします。それも、1月1日に主日礼拝があるなんて、今まであまりなかったような気がします。題にもありますが、私たちキリスト者の人生の目標は「朽ちない冠」をいただけるよう、人生を歩むことではないでしょうか。人によってさまざまな人生の目標があると思うけれど、人生をランナーに例えてみると、節制をしながら朽ちない冠を目指してテープを切りたいと思います。「朽ちない冠」とは永遠の命をいただくということです。年頭に当たって、本当に適った題だと思えます。私たちキリスト者の目標は永遠の命をいただくということです。初代教会の使徒たち、また信徒たちは永遠の命をいただけるよう歩みました。その歩みは2023年たってもまだ続いているのです。これからもずっと続く道でしょう。

19節から23節までが一つのまとまりです。ここでパウロはどのようなことを言っているのでしょうか。少し不思議な気がします。人間このように自由自在になれるのでしょうか。私はこの御言葉を讀んだ時、正直私とはかけ離れていると感じました。「すべての人の奴隷になりました」とあります。この教会には奴隷はいませんが、もしいたとしてもすべての人の奴隷となれるだろうか、と思います。でもパウロはなれるのです。多くの人を得るためです。この奴隷という言葉には幾つかの意味が含まれています。一つは20節にあるように「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになる」こと。このユダヤ人とは、モーセの律法の下にあるユダヤ教徒という意味であり、「律法に支配されている人」は繰り返して語っているのです。同じユダヤ教徒を言っているのではないのでしょうか。21節「律法を持たない人」これはどのような意味でしょうか。この人たちは異邦人です。ここでパウロは自然律法を語っています。自然律法とは、人が生まれながらに備えている律法です。言い換えると、道徳や倫理です。同じころ書かれた『ローマの信徒への手紙』2章14～16節にはこのようになります。「たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合って、同じことを示しています。そのことは、神が、わたしの福音の告げる通り、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう」と語っています。例えば子供が無人の八百屋でリンゴを、お金を払わないで取った場合、自分の心の道徳観で「自分はいけないことをした」と思うのです。そして、後で親に言ってお金を払いに行くでしょう。モーセの律法には、第8戒「あなたは盗んではいけない」とあるのですが、そのような律法を知らない異邦人でも自分自身が律法となって、いけないことをしたと思って返しに行くのです。それが自然律法です。そのようなふるまいを天の神さまはご存じであり、この世の終末の時に明らかにされる、と説いているのです。私は

とてもこの御言葉に慰められました。私たちの同胞である日本人は多くは教会に行っておらずキリスト者ではありません。そのような人たちは救われないのだろうか。天の国に移されないのでしょうか。逆に自然律法を守っていないキリスト者も中にはいるのではないか。例えばキリスト者であっても、政府の国の命令でやむなく軍隊に入り戦争して多くの人たちを殺めたとしたら、そのような人たちは天の国にいけるのでしょうか。第6戒「あなたは殺してはならない」とあります。大きな問題ですが、パウロは、「人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう」と含みのある言葉を残しています。

いきなり話が変わって、山の話になるのですが、前、40代の頃ですが富士山に登ったのです。前の教会の夏期学校で生徒と一緒に登ったのでした。七里教会に来る途中、国道122号を突っ切るのです。その時年末年始は富士山がくっきりと麗しく見えるのです。白い雪を冠にした美しい山です。その富士山の登山口は幾つものルートがあり、というのは、富士山は幾つかの県境に接しているため4つのルートがあるのです。登山者はそれぞれのルートで登ります。富士山は3776mの山ですが、とても直線では登れないので、ぐるぐる回って登るのでだいぶ時間はかかります、それでも早い人は5～6時間で頂上につく人もいます。気温は5度かそのくらいでしょうか、夏に登るのですがね。空気が薄くなるので気持ち悪くなったりします。でもやっと頂上につくと感謝でした。それは登山の話なのですが、使徒ヨハネは示しています。「イエスは言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない』」とこのように示していますが、救いに至る登山口は一つなのです。イエス・キリストです。登山口がそんなに複数あったら大変でしょう。天国は神々でいっぱいになります。パウロは偶像なる物はないとはっきり明言していますから。誰が救われるかわからないけど、イエス・キリストを通して裁かれる日に明らかになるのです。ここでブラック・ユーモアを一つ。牧師はさぞかし天国に行くだろう、と思っている人も、いないと思いますが、「牧師の舌は天国でひらひら舞い、牧師の体は地獄に落ちる」とある有名な神学者が言ったそうです。そうならないよう話す時は、良くお祈りして口先だけにはならないよう努めたいと思います。

今年、プロテスタントの教えが日本に伝道されて164年です。主イエスは「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」と命じられました。宣教師の先生方ははるばる遠いアメリカから海を越えて極東の日本に来られました。今なら飛行機ですが、あの時代太平洋を越えてご苦労されたと思います。どこも泊まる場所がないから、お寺さんで過ごしたようです。アメリカのミッション団体から一流の伝道者・医者を送られたのです。昔、伝道150年の記念講演会で横浜まで行って来ました。その時のお話を少しおすそ分けしたいと思います。講演者は、代々5代目のクリスチャンの方で湊 晶子（みなと あきこ）さんという方です。晶子さんが朝、起きると毎朝お母さんが祈っていたそうです。そして、何かで不安になっていた時、「汝ら、信仰薄き者よ」と祈ってくれて、少し何かで天狗になった時は「おのれを高うする者は低うされ、低うする者は高うせられる」と諭

されたそうです。ごまかしたときは「小事に忠実なる者は、大事に忠実なり」と戒められた、と述懐されてました。この湊 晶子さんという方は、元東京女子大学の学長だったということです。娘さんが三人いらして皆、受洗しお孫さんが 7 代目のクリスチャンになったそうです。晶子さんはその頃、御年 85 歳でした。あれから 16 年たっているのです、今だったらもう何代目になっているのでしょうか。少ない日本でもそのような家系があるのは嬉しく励まされることです。

パウロは 22 節で「弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです」と言っています。この弱い人は 8 章で言われているように、神殿下がりの肉は食べてもいいのだけれど、弱い人がつまずいて、教会から脱落してしまわないように、わたしも弱い者になって、そのような人を受け入れるために弱い人になろうと言っているのです。そして、「わたしが福音に共にあずかる者となるためです」と言っていますがここが大事ですね。伝道者・牧師・信徒は、いつかは脱落するかもしれないのです。御言葉を伝えておきながらも、いつかは教会に行けなくなるかもしれない。健康上の理由でならまだしも、教職を離れると段々行けなくなるかもしれません。住まいが教会から離れると、近くに教会があればいいけれども、ない場合、段々疎遠になるのではないのでしょうか。主の救いはもうあるからと安易に考えてしまう危険性があるかもしれません。やはり、教会に行くことが大事になるのです。そのような意味で、パウロは、自分は失格者にならないように自分の体をうち叩いて服従させると言います。

24～27 節はまた一つの段落です。コリントの町は西にオリンピアがあります。オリンピックが最初に開催された町です。パウロの時代は 3 年に 1 回競技大会が開かれたそうです。一等賞で頭に輝く冠は、最初は野生のセロリかパセリで、後になって松で作られたということです。競技はマラソン、ボクシング、レスリング、円盤投げ、跳躍の 5 種目でした。きっと、パウロも見学したのでしょう。パウロが信仰の歩みをランニングに例えて「あなたがたも賞を得るように走りなさい」と励ましています。もっとも、パウロの気持ちは参加した全員が賞を取りなさいというものですから、他を出し抜いて走れと勧めたわけではありません。クリスチャンとして第一歩を踏み出しても皆が全員ゴールインできるわけではないです。途中、腹痛を起こしたり、脱水症になったりして棄権するかもしれません。オリンピックでは、参加するに資格がありました。ギリシャ人の男子であり、前科がなく、10 か月訓練して合格した者が出られるのです。勿論、反則をしたものはその場で除かれます。ですから選手は賞を得るために不正をしたいと思う気持ちを抑え、節制して自分の体を叩いて従わせるのです。

キリスト者は、この道何十年も信仰の生活をしていても、パウロの言うように、まだ、道の途中であり冠を得てはいないのです。であるから、他の人に伝道しておきながら、失格者にならないように、道を外れないようにルール違反をしないよう信仰の道を進まなければならないのです。これは自分にも言っていることです。前、よその教会で礼拝の御用をしている時、ある病人が福祉タクシーに乗って礼拝に出られました。その方は鼻にチューブを付

けて車いすに座っておられました。出席するにどんなにか大変だったでしょう。でも長年の習慣で日曜日に礼拝に行きたいと思われたと思います。付き添いの方はおられませんでした。一人でタクシーに乗って来られたのです。感動しました。

どんなに良い松の冠を被ってもオリーブや月桂樹の冠を被っても、やがては枯れてパラパラと落ちてしまいます。私たちは主から「朽ちない冠」をいただけるよう、信仰の人生を走りぬぎたいと思います。